一

穏やかな日和が続いた。

磐音はいつもの長屋暮らしに戻っていた。朝の間に宮戸川に鰻割きに行き、帰りに六間湯の朝湯に立ち寄る。それが近頃の磐音の贅沢になっていた。

丁子屋の白鶴乗り込みの影の護衛を務めた磐音には、四郎兵衛を通して丁子屋宇右衛門から二十五両の謝礼が出て、手代の竹造が届けてくれた。

「気兼ねなくお納めくださいとのお頭の言付けにございます」

とはいえ、奈緒の身を守っての謝礼だ。複雑な気持ちではあったが、吉原の心遣いを素直に受け取ることにした。

そのこともあって磐音の気持ちにはいささかゆとりがあった。

この日も六間湯の戻り道、神田三崎町の佐々木玲圓先生のお許しを得て道場に通おうかなどと考えながら、長屋への道を辿っていた。すると六間堀の堀端にむさくるしい格好の浪人が佇み、懐手をしながら無精髭の顎を撫でていた。

竹村武左衛門だ。

「湯の帰りか。朝から悠長なものだな」

「鰻の臭いがどうしても手に染み付きますのでね」

磐音はのんびりと答えていた。

「仕事は暇そうじゃな」

「見てのとおりです」

「手伝ってはもらえぬか。珍しく仕事が二つ重なった。柳次郎は、母者の供で柏木の縁戚に法事に行っておらぬのだ」

かまいませんよ、と磐音は請け合い、訊いた。

「どのような仕事でございますか」

「なあに簡単な仕事だ。小梅瓦町の百姓家の離れに、おとくというばば様独り住んでおる。其の用心棒じゃ」

「おばばどのの用心棒ということは、たれぞに命を狙われているのですか」

「それは道々話そう」

と武左衛門は言った。

磐音は濡れ手拭いを手にしたまま武左衛門に従った。

「当人は盗賊が金を狙っておるというのだ、なあに妄想だ。隠し金があるようなばば様ではないわ。髪は乱れ放題、湯も何日も入っておらぬ。それに、食べ物ときたら、年がら年中、小梅村の百姓家を回って貰ってきたくず野菜の塩煮ばかりじゃ。それがしも三日ほど付き合ったがうんざりした。夕餉の賄い付きで日当は三百文だ」

職人の手間賃よりもだいぶ安い。

「坂崎さん、盗賊に狙われているなんぞ、ばば様の考え過ぎだ。だれがあのようにむさいばば様を狙うものか。命を張って斬り合うことは断じてない」

「竹村さんはどちらにお仕事ですか」

「それがしも用心棒じゃ。口入れ屋に寄ったらな、うまい具合に本所松倉町の医師が住み込みの用心棒を、一日二分で探しておるという。こちらは昔の患者に脅かされているという話だ」

武左衛門は七倍の手間賃の仕事を江て、請け負っていた分の悪いほうを磐音に任せようとしていた。

「かまいませんよ」

「そうか、助かった」

武左衛門は、ほっとした声をだした。

二人は話しながら竪川沿いに東に進み、横川と交わる北辻橋際で北へ曲がった。

横川の河岸を入江町、長崎町、清水町、新坂町、中之郷横川町と本所を進めば、横川は斜めに大川へとおれて源森川と名を変える。

町名はこの界隈に二箇所、瓦を焼く竈があり、一年におよそ二十数万枚を焼いていたことに由来する。

源森川の北岸に渡ると瓦が日干しにしてある風景が広がった。

おとくの家は、瓦竈の隣に接した百姓家の離れといえば聞こえもいいが、納屋に手を加えた藁葺だった。

母屋とはだいぶ離れて、お互いに暮らしぶりを見ることもない。

「ばあさん、それがしの代わりを連れてきたぞ」

武左衛門が胴間声を張り上げると、庭の隅に筵を広げ、大根を陰干しにしていた女がゆっくりと振り向いた。

そのかたわらに蝋梅が香しい花を咲かせ、ほんのりと薄暮に浮かんで見えた。

確かに髪は乱れ放題、着ている縞柄から饐えた臭いが漂ってきそうな感じがした。だが、顔の肌には張りがあって、色艶も悪くない。

ばば様と呼ぶにはまだ間がありそうだ。

「剣術の腕前はそれがしよりも数段上だ。なにしろ神田三崎町の直心影流佐々木玲圓道場で揉まれた免許持ちだ。それに人柄もいたって謹厳実直……」

と武左衛門が大仰に磐音を売り込んだ。

が、おとくは、武左衛門の言うことなど聞き流して磐音の風体を上から眺め下ろし、

「この旦那よりはちっとはましそうじゃな」

と吐き捨てた。

「それがしの力量も知らぬくせに無礼な言い草だな」

「お前様の腕前などを見通しじゃ」

おとくは言い放ち、

「勤めは暮れ六つから明け六つまで、夕餉は出す。寝間は、あの小部屋に夜具が入っておる」

と庭の片隅に建つ小屋を指した。

「おばばどの、それがし、朝の間に鰻割きのしごとを持っておる。六間堀の北之橋が勤め先でしてな、明け六つ前にはこの家を出るが、よいか」

「宮戸川の鰻割きをやっておるのか」

地理には詳しいのか、おとくは宮戸川の名まで上げた。

「それがしにとって大事な勤め先でござる」

「構わねえよ」

「夕餉は長屋で食してまいる」

「夕餉抜きじゃとて日当の三百文は変わらぬ」

とお得が上目遣いに磐音を見た。

「構いませぬ」

と答えた磐音は、

「ちと役目柄のことを聞いておきたい。おばばどのはたれぞに命を狙われておられるのですか」

おとくの返事はすぐに返って来なかった。

「事情を知らなければ、まさかの場合に対応が遅れて後手に回ります」

「おまえ様も、この貧乏浪人と同じで信じてはおらぬのか」

「おばばどのが日当を払ってまで警戒しておられるのです。確信あってのことと思います」

かたわらから竹村武左衛門が手をひらひらと横に振った。

「相手は七、八人、人の命を奪うことなど屁とも思っておらん連中じゃ」

「なぜ狙われるか、話してはくれませぬか」

おとくの返答はにべもない。

「侍ですか、町人ですか」

「侍ではないわ」

とようやく答えたおとくは、

「夜中に奴らが押しかけたとき、追い払うのが仕事じゃ」

「一人で七、八人を追い払うのですか」

「神田三崎町の佐々木道場の門弟というおんがほんとの話なら、それくらいはできよう」

おとくは、用は済んだとばかり、納屋に入っていこうとした。

「今宵六つ前には、戻って参ります」

磐音はその背に言うと、武左衛門とおとくの家を後にした。

「坂崎さん、あんな具合だ。気軽は気軽じゃが、なにせ隙間風の吹く小屋に寝泊まりせねばならぬので寒い。その上、外の厠に行かねばならぬので辛い。

ぼやく武左衛門の言葉には、磐音に譲ってほっとした安堵が窺えた。

「おばばどのは、いつからあの家に住んでいるのですか」

「大家の百姓は五年と五ヶ月になると言ったな。家賃は三月ずつの前払い、小銭を貯めておることは確かだ。日当も、夕刻に行くと小屋にきっちり三百文置いてある」

北割下水に戻ったところで竹村武左衛門は、新規の仕事先に向かうべくそそくさと別れていった。なにしろ一日二分の勤め先だ、最初からしくじりたくはないのであろう。

一人になった磐音は、金兵衛長屋への道を辿りながら、豊後関前藩上屋敷を今津屋の老分由蔵が訪ねるのは、今日の昼下がりだったことに思いを馳せた。

新任の江戸家老福坂利高と会見した翌日、磐音は今津屋を訪ねた。

由蔵に正直に話し合いの様子を告げ、豊後関前藩が入費の二千五百両の借金担保に、藩の財産である書画骨董刀剣類を差し出すという提案を告げた。

由蔵はまず、

「坂崎様、ご苦労さんでしたな」

と労い、

「さすがに坂崎様のお父上にございますな。国表にあって江戸の事情を呑み込んでおられる」

と正睦の判断を褒めた。。

「関前藩の誠意を感じ取りました」

「お会いくださるか」

「私が上屋敷に参りましょう。ですが、書画骨董刀剣となると素人の私では判断がつきかねます。知り合いの目利きが二人ほど同行することになりますが、よろしゅうございますか」

「知らせておきます」

「上屋敷となると、坂崎様はご一緒できませんな」

「遠慮いたしたほうがよろしいかと思います。なにか差し支えがございますか」

「まあようございましょう。これからの判断は、私に任せてくだされ」

磐音は中居半蔵と神田明神の茶屋で会うことにした。そこで今津屋の意向を伝え、承諾を得て、由蔵らが上屋敷を訪ねる日時をきめようと考えたのだ。

中居半蔵は磐音と会って話しを聞くなり。

「坂崎、そなたが同席いたさぬ会見の行方が心配でな。正直、今津屋に断られば、関前藩に借金の当てはない」

と追い詰められた買おおで言ったものだ。

「とは申せ、藩を抜けた私が今津屋に同行する訳にも参りませぬ。ここは中居様、なんとしても切り抜けてください」

「なんぞ知恵はないか」

「正直がいちばんにございます。関前藩の現状をありのまま伝えることです」

中居は頷くと、暫く手の中で茶碗を弄び、

「坂崎、過日の下屋敷の会見の後、おれは密かに上屋敷の蔵に入った」

と言い出した。

「関前の歴代の藩主が集められたという書画骨董を確かめるためだ」

磐音は中居の暗い声に不安を感じた。

「藩の宝、藩主の守り刀といわれてきた備前長船盛光の太刀も國光の短刀もないんだ」

「どういうことにございますか」

「御用の金に困られた先の江戸家老篠原三左様が、すでに売り払われてしまわれたようすなのだ」

「なんとうことで」

「三左様は、福坂利高様と交代されて隠居なされたが、ここ数年、病がちで藩務をこなされておられぬ。病人に売り先を問い詰めたところで、なんの役にも立たぬ」

「書画骨董はいかがでございますな」

磐音は慌てて訊いた。

「秘匿されておるはずの狩野永徳の屏風も尾形光琳の掛け軸もない。見当たらぬ」

さすがの磐音も返事のしようがなかった。

しばし無言の時が続いた。

「そなたが折角今津屋を引っ張りだしてくれたが、これでは、心証を悪くするばかりじゃ」

最悪の事態に立ち至る。

「磐音」

と声を絞り出した。

磐音も必死でなにか打開策はないかと考えた。が、最後の望みも消えた今、豊後関前藩んい新たな担保があるとも思えなかった。

「どうしたものか」

「どうもこうも手立てはございませぬな」

二人は温くなった茶を啜り合った。

磐音の脳裏に藩主の実高の顔が浮かんだ。

長命であった先代藩主の後を継いだのが四十六歳のときのことだ。

人柄は温厚で藩士や領民からも慕われている。だが、政治は不向き、千代田の城中では凡庸な人物と評されていた。

しかしながらただ今の関前藩の苦衷は、実高によってもたらされたものではない。代々の藩主たちの藩政への無関心と、歴代の重臣たちの無為無策が招いたものだ。

その付けが十代目の関前藩主実高に重く伸し掛かっていた。

（なんぞ手は……）

「中居様」

「なんぞあるか」

「ただ一つ考えられることがございます」

「なにか」

磐音はしばらく沈思して考え直した末に中居に告げた。

「…………」

中居半蔵はなにも答えなかった。そして、顔を朱に染めて沈黙した続けていたが、

「坂崎、そなたの考え、中居半蔵、受けよう。それでも無理とあらば、それがしが腹を切るまでじゃ」

磐音は黙って頷いた。

その会見が今の刻限に行われていた。

磐音は一旦、金兵衛なぎゃに戻ろうとした足を止め、両国橋へと向け直した。どこかで昼飯でも食べ、今津屋で由蔵の帰りを待とうと思い直したのだ。

二ツ目之橋まで来たとき、

「浪人さん」

という幸吉の声がした。

背に竹籠を負っているところを見ると、川向うまで鰻を売りに行ったのだろう。そのかたわらには幼馴染のおそめがいた。

「幸吉どの、昼は食されたか」

「腹べこで最前から腹の虫が鳴き通しだ」

「それがしもまだでな、どこぞ飯屋に入ろうと思っておったところだ。付き合ってくれぬか」

「馳走してくれるのか、ありがてえや」

幸吉の返事におそめが、

「幸吉さん、行ってらっしゃいな」

と言うと、南六間堀に向かおうとした。

「おそめちゃん、よかったら付き合ってはくれぬか。幸吉どのには、このところ用事を頼みっ放しでな、前々から一緒に飯でも食べようと思っておったところだ」

おそめがもじもじして幸吉の顔を窺った。

深川の裏長屋に住む子供が外で食事をするなどまずない。

「おそめちゃん、この浪人さんに遠慮はしないことだぜ」

とおそめを引き止めた。

「幸吉どの、なにが食べたいな」

「そうだな、馬喰町の笹屋が始めたという鴨なんばんを食べたことがねえ。馳走してくんな」

「蕎麦切りか。どこぞに蕎麦屋があったかな」

「この界隈なら、松井橋際の十二庵がうまいそうだ」

「よし、参ろうか」

三人で竪川沿いに大川へと向かった。すると十二庵の店先には、稲荷寿し売りが屋台を下ろして商いをしていた。

「稲荷か、稲荷もたべてえな」

幸吉が思わず洩らし、

「幸吉さん、あれもこれもと迷うなんてお里が知れるわよ」

とおそめに注意された。

「世の中には食ってねえものがいろいろとあらあ。迷うのは仕方がねえよ」

「幸吉どの、蕎麦屋に持ち込んでも構わぬかな」

磐音が問う声を稲荷寿司売りの親父が受けた。

「旦那、十二庵の親方に許しを受けて商売してんだ。中で蕎麦さえ注文してくれれば、文句は言わねえよ」

と言った。

「ならば、四本貰おう」

一本十六文という丸太のように長い稲荷寿司を四本買った。食べ易いようにと、親父が四半分に包丁をいれてくれた。磐音はそれを竹皮に二本分ずつ二つ包ませた。

「浪人さん、いくらおれでも二本の稲荷寿司と蕎麦は食いきれないぜ」

「食べきれなかったら、長屋に持って帰ることだ。一つは幸吉どの、もう一つはおそめちゃんの分だ」

「さすがに苦労している浪人は気配りまで違うぜ」

幸吉が嬉しそうに包みを一つおそめに渡した。

おそめが遠慮深げに、それでも顔を綻ばせて受け取った。

蕎麦屋の店の中は、昼の時分が過ぎたせいか、隠居風の老人が盛を肴に酒を飲んでいるばかりだ。

「おそめちゃん、鴨なんばんでよいかな」

「あたし、食べたことがないので分からない」

小さな声が答えた。

「実をいうとそれがしも食べたことがない」

磐音が笑うと、おそめの緊張がようやくほぐれた。

「初物を食べると七十五日長生きするというでな、三人で鴨なんばんを食してみようか」

鴨なんばんの蕎麦切りを頼むと、幸吉が時分の竹皮を開いた。

「おそめちゃん、正月がまた来たようだぜ」

幸吉が稲荷寿司に手を伸ばしかけ、

「おそめちゃんは食べねえのか」

「鴨なんばんでお腹が一杯になると思うの。だから、よければうちに持って帰りたい」

目の前の稲荷寿司の誘惑に迷っていた幸吉も頷いくと、おれも土産にしようと竹皮を包み直した」